

## らくがき

ひろしは家を建てました。白い壁の立派な家でした。ひろしはいつもの様に家を出ました。そして、いつもの様に家の前に立ちました。でも、今日はいつもと違っていました。

あの白い壁に何か描いてあるのです。しかも、でたらめな線が。誰が？と考えるながらも、何もすることが出来ませんでした。翌朝も家を出ました。外へ出たひろしは自分の目を疑いました。

また絵が描いてあるのです。しかし、前と違い、それは見事な絵でした。ひろしはしばらく動けませんでした。その絵は、それ程素晴らしかったのです。誰が？素直にそう思いました。

ひろしは確かめる決心をしました。そして家族が寝静まってから、夜中にそっと外に出ました。ひろしは陰に隠れました。いくら待っても誰も現れず、何も起こりませんでした。

ひろしは、いつの間にか眠ってしまいました。そして夢を見ました。ひろしは、絵を描くことが大好きでした。将来は絵描きになりたいと思いましたが、諦めました。

最後の思い出に、一枚の絵を描きました。そして、それを近くの川に流しました。「お父さん」娘の声が聞こえました。目の前に壁がありました。

なぜかひろしは刷毛を持っていました。そしてその刷毛を壁に当て、そっと撫で下ろしました。「できた」なぜ自分がそう言ったのかわかりませんでした。

振り向くと三人の娘が、ひろしと家の絵を交互に見上げていました。そして今度は声を合わせて言いました。

「お父さんだったの？」驚いたひろしは、娘達が見ている壁の絵を見ました。そこにあったのは、あの日川に流したあの絵でした。

【37期音楽B専攻／米田 博志】

※本や読書にまつわる投稿を700字程度でお寄せください。詳しくは事務室まで  
なお、本の寄贈については現在受け付けておりませんので、ご了承ください。